

京都市英語教育の 充実のための 取組指針

—実践的英語力を育成するために—

令和9(2027)年度～令和13(2031)年度

伝え合う力

違いを越えて
つながる力

人生を拓く力

令和8年8月発行

京都市教育委員会

目次

第1章 本取組指針について	1
第2章 目指す姿	4
第3章 具体的な取組内容	5
第4章 取組の推進体制	10
第5章 指標	11
資料集	12
京都市英語教育のあゆみ	12
小学校英語の授業時数の変遷	13
取組指針の策定経過	14
参考資料	17

第1章 本取組指針について

1 はじめに

国際都市・京都の特質

世界中から多くの人々が訪れる京都市は、世界と文化的に広く交わりながら発展を続ける国際都市です。

京都は、千年以上前から、世界に開かれたまちとして発展を続けてきました。そして、その長い歴史の中で、国内外の多様な文化を積極的に受け入れ、昇華させ、独自の豊かな文化を築きあげてきました。こうした歩みを背景に、京都市は、「世界文化自由都市宣言」を都市の最上位の理念に掲げ、国や民族などの違いを超えた自由な文化交流を大切にし、文化を基軸としたまちづくりを推進してきました。

国際都市・京都の人づくり

京都市は、「世界文化自由都市」として、国際感覚を持った人づくりを掲げ、学校教育だけではなく社会教育も含めた生涯学習の中で、市民が外国の文化や言葉、国際協力の重要性について学ぶ機会を充実させるなど、国際理解教育を推進してきました。このうち、学校教育においては、英語の知識や技能だけではなく、異文化や様々な言語への理解、自分の体験や考えと結び付けて英語を活用する力、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度など、小学校から高校までを通して実践的英語力を育むとともに、探究的な学びを推進する等、グローバル社会における人材育成を重視して取り組んできました。

小学校英語教育の推進

平成6年度から全国に先駆けて小学校英語活動のカリキュラム開発に取り組み、平成11年度には全小学校で英語活動を開始しました。翌年度には小学校にALTを配置し、児童が日常の中で英語に触れる機会を創出しました。さらに、令和2年度からは小学校低学年においても英語活動を全市で導入するなど、小学校における英語教育の推進を図ってきました。

創意工夫あふれる授業実践の促進

学習内容や評価の在り方を明示した「京都市立学校教育課程指導計画（京都市スタンダード）」を策定し、全ての小・中・小中学校での指導と評価の充実を図ってきました。特に、単元ごとのパフォーマンステスト（小学校では学期ごとのパフォーマンスチャレンジ）により、実践的な英語力の育成状況を的確に把握し、指導改善につなげています。

世界を舞台とした探究学習の促進

平成11年度以降重点的に取り組んできた探究学習を土台として、高校段階では、海外研修旅行の実施や、海外での探究学習を実現する本市独自の研修プログラムの創設など、グローバル人材としての素地を育むとともに、世界を舞台に探究学習に取り組むことができる環境を整備してきました。

小学校段階から英語に慣れ親しみ、英語でやり取りする機会を体系的に確保するとともに、ALTの活用やパフォーマンステスト（チャレンジ）の実施を通して、英語を活用する力の育成を図ってきました。

また、「京都市スタンダード」に基づく指導と評価の充実により、各学校では学習状況の把握と、それに基づく授業改善が進められてきました。あわせて、研究会による活発な研究活動も指導の充実に大きく寄与しています。さらに、高校段階における海外研修や探究学習の充実により、グローバルな視野を持って主体的に学ぶとする態度の育成が進んでいます。

加えて、校種横断的な研修の実施により、校種間の接続を意識した取組も進展しています。

取組の課題とその対応方針

- 課題① 研究指定校での調査結果では、小学校から中学校にかけて、学年が上がるにつれて英語学習への意欲や自信が低下していく傾向が見られます。
- 方針 学習への意欲や自信を維持・向上させるには「伝え合うことができた」という成功体験を積み重ねることが必要です。そのために、聞くことの力を基盤として実践的英語力の育成を図るとともに、ALTやICTツールを活用し、コミュニケーション活動のさらなる充実を図ることが重要です。とりわけ、児童生徒がALTを身近な存在として感じながら、「やり取り」を通して、その場に応じて伝え合う力や確かな発信力を育むことが求められます。
- 課題② 小・中学校段階においては、外部試験を悉皆で実施できていないことから、全国的・世界的な基準に基づき、全ての児童生徒の英語力を客観的に測定できていません。そのため、CEFRに基づく児童生徒の英語力の見取りにおいては、学校によりばらつきが見られ、各学校の取組や児童生徒の学習成果を、データに基づき検証する環境が整っていません。
- 方針 英語力の測定については、授業やパフォーマンステスト(パフォーマンスチャレンジ)等での見取りが大変重要である一方、それだけにとどまらず、より大きな集団の中で、児童生徒の英語力を客観的な指標により把握することが求められます。これは、児童生徒の学習意欲の向上や教員の指導改善に資するものであり、各種取組の効果を適切に検証し、児童生徒の英語力を底上げしていくために不可欠です。これまで実施してきた実用英語技能検定の受験支援の継続に加え、外部試験の悉皆実施を導入することで、世界に通用する実践的英語力を育成できているかを教員が振り返り、指導改善につなげる機会を全ての学校で確保する必要があります。
- 課題③ 「授業は英語で行うことを基本とする」ことについて、これまでから「英語で行う授業」の考え方やそのモデルについて教員研修等で発信し、周知を図ってきましたが、授業における英語担当教員の英語使用状況は、十分その水準に達しているとはいえない状況です。
- 方針 「授業は英語で行う」ことの趣旨は、児童生徒が英語に触れる機会を確保することと、教員が積極的に英語を使う姿勢と態度を行動で示すことで、児童生徒の英語使用を促すことにあります。教員研修等の機会にこうした趣旨を改めて伝えつつ、ALTとのチームティーチングによる実践をはじめとする授業のあり方について具体的に示す取組を粘り強く継続するとともに、ALTを活用して授業を英語で行う指導モデルの定着を図るためにも、ALTの配置を充実させることが必須です。
- 課題④ これまでも、様々な計画や指導資料を作成・発信してきましたが、その効果の検証は必ずしも十分とはいえませんでした。
- 方針 計画の策定から実施、検証、改善までのサイクルを確立し、継続的に見直しを図る取組が必要です。

取組指針策定の基本的な考え方

本取組指針では、令和9（2027）年度から令和13（2031）年度までの京都市の英語教育の方向性を示すとともに、目標とする客観指標を設定し、実施期間における取組を検証・改善するサイクルの確立を図ります。

また、「事例集」を作成し、全市で推進する実践について、広く・分かりやすく・具体的に発信します。「事例集」は各種研修の場面においても活用し、英語教育に関わる全ての当事者が日常的に参照できるものとするを旨とします。さらに、実施期間中も引き続き学校現場から好事例を広く収集し、内容を適宜更新します。

取組指針の策定にあたっては、全国的な動向や外部有識者からの意見聴取の内容も踏まえ、具体的な指導内容に関する最新の知見や大所高所からの視点を反映しています。

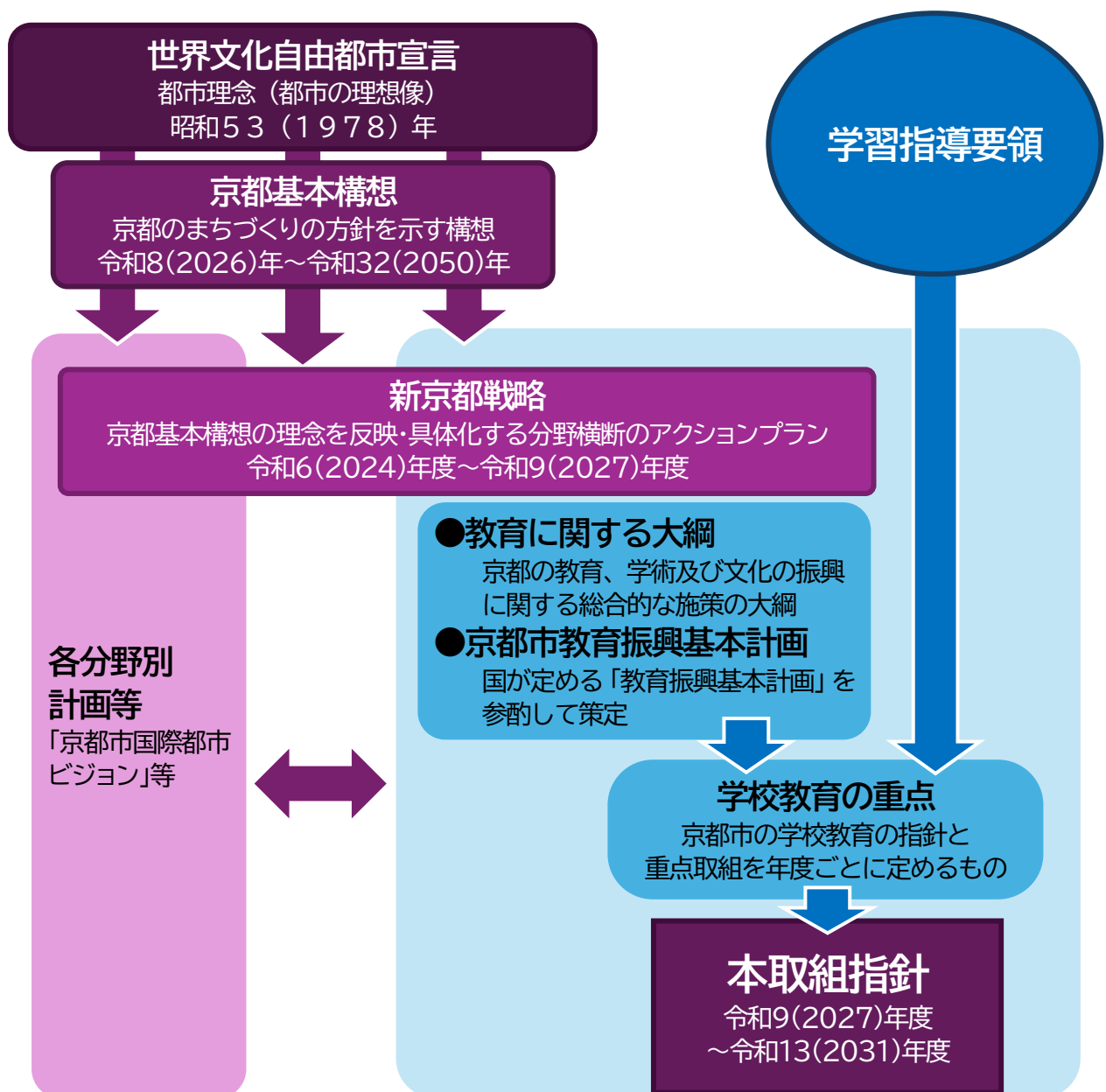
学校、研究会、教育委員会が一体となって京都市の英語教育のさらなる充実を目指すための指針として、本取組指針を策定します。

2 取組指針の位置づけ

本取組指針は、京都市があらゆる政策の最上位の都市理念に位置付ける「世界文化自由都市宣言」の下、京都のまちづくりの方針を示す「京都基本構想」を、英語教育の分野において具体化する方針を定めるものです。「京都基本構想」が掲げる「世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける」京都市民の育成に向けて、学校教育が果たすべき役割を展望し、英語教育の充実に向けた方針を定めます。

また、京都の学校教育の指針と重点取組を定めた「学校教育の重点」が掲げる「グローバル化時代に対応する実践的英語力の育成」を実現するための方針を、学習指導要領に則って定めるものでもあります。

さらに、本市の政策等の方針を示す「新京都戦略」においては、「グローバルに活躍できる人材の育成」が掲げられているところであり、「京都市国際都市ビジョン」等の関連する計画や、本市全体の政策動向にも留意しつつ、本取組指針を策定しています。



3 取組期間

令和9（2027）年度から令和13（2031）年度までの5年間とします。

第2章 目指す姿

京都基本構想に基づく子どもたちの将来像

自ら学び続け、社会の変化に対応しながら、
人と人とをつなぐコミュニケーション能力を生かして、
世界中の人々と様々な相違を超えて文化交流し、
対話や協働により、新たな文化を創造し、
心豊かに人生を歩む大人

子どもたちの将来像を実現するための京都市英語教育

ビジョン

「国際都市・京都から世界へ」実践的英語力の育成

英語教育を通して目指す子ども像

英語でのコミュニケーションにおける「物怖じしないスピリッツ」を身につけ、
国際的視野に立って人生100年時代を心豊かにたくましく生きる児童生徒

3つの育成目標

育成目標① 「伝え合う力」

英語を身近なツールとして使い、進んで自分の思いや考えを伝え合ったり、
京都や日本の魅力を発信したりできるようになる。

育成目標② 「違いを越えてつながる力」

英語学習を通して多様な価値観にふれ、自分や他者の世界を
広げられるようになる。

育成目標③ 「人生を拓く力」

グローバルな社会の創り手として、生涯にわたり学び続け、
社会や世界に貢献しようとする。

第3章 具体的な取組内容

京都市英語教育12年間プログラム

「国際都市・京都から世界へ」実践的英語力の育成

本取組指針が目指す取組の全体イメージ（小学校段階～高校段階）

伝え合う力 違いを越えてつながる力 人生を拓く力

小学校段階

中学校段階

高校段階

1年 2年 3年 4年 5年 6年 1年 2年 3年 1年 2年 3年

英語に親しみ、英語でのコミュニケーションを楽しむ

- ・英語を聞いたり、話したりすることに慣れ親しむ。
- ・英語を使って伝わる喜びを感じる。
- ・世界には様々な人や文化があることを体験的に知る。

英語で伝え合い、多様性を理解する

- ・自分の思いや考えを英語で表現する。
- ・相手の話を聞き、やり取りを続けようとする。
- ・多様な考え方や文化への理解を深める。

英語でつながり、発信し、協働する

- ・自分の考えを論理的に発信する。
- ・対話を通して思考を深める。
- ・世界的な課題に関心を持ち、他者と協働して行動する。

※ 指導にあたっては、各校種・発達段階の指導内容を踏まえ、学びの連続性が保たれることを意識する。
※ 育成学級・総合支援学校では、児童生徒の実態を踏まえながら、ALTとのコミュニケーション活動等、他者理解や英語に慣れ親しむ活動を進める。

英語力の把握

CEFR
判定

CEFR
判定

CEFR
判定

パフォーマンスチャレンジ・パフォーマンステスト

希望制団体受験

検定受験料補助制度

活動例



英語で遊ぼう！



絵本の読み聞かせ



English Shower



生成AI英語アプリでの
スピーキング・ライティング練習



プレゼンテーション
(英語学習発表会)



ディベート



ALTと話そう！

英語を
楽しむ



生活場面で英語を使う活動

英語で
伝え合う



探究型フィールドワーク

英語で
未来を
切り拓く



各校海外研修旅行
海外で探究的に学ぶ留学プログラム

授業における学習活動の充実

【取組１】授業は実際のコミュニケーションの場とする。

- 「本物」の目的や場面、状況下での必然性のあるコミュニケーション活動は、ＡＩに代替できない重要な教育活動です。教員が明確に目的意識をもって英語でのコミュニケーション活動を通して指導することが求められます。児童生徒の「英語で伝え合いたい」という思いを大切に、「相手に伝えられてうれしい！」「相手のことが理解できてうれしい！」があふれる授業づくりを通して達成感と学習意欲を高めます。
- 「英語の授業は英語で行う」ことは、「英語で表現することが当たり前」の環境を作ることにつながり、英語で伝え合う力を向上させる第一歩となります。英語に触れる機会を最大限に確保するためにも、ＡＬＴも活用しながら英語を用いて指導しましょう。また、教員が積極的に英語を用いて児童生徒に伝えようとする姿勢を示すことは、児童生徒の積極的な姿勢を引き出すことにもつながります。

【取組２】目的をもって音声に触れられるようにする。

- 聞くことは、読むこと・話すこと・書くこと、全ての力を支える基盤となります。特に、相手の発話を理解する力は、英語でのコミュニケーションへの自信や意欲の向上を支えます。単に聞き流すのではなく、「聞くこと」を通して文字や綴りに慣れ親しんだり、文構造への理解を深めたりする等、他の技能にも生かすという目的をもって音声に触れられるようにすることが重要です。
- 日本語と英語は文構造が大きく異なることから、文構造（語順等）の理解が重要であり、文意が分かる状態で、文構造を意識しながら行う音声トレーニングを継続して行うことが有効です。帯時間等を活用した English Shower 等により、継続的に取り組むことで効果が高まります。

【取組３】ＩＣＴツール（ＡＩを含む）を効果的に活用する。

- デジタル教科書や授業支援ソフトをはじめとするＩＣＴを効果的に活用し、コミュニケーション活動の充実につなげることが重要です。教員は、様々な提案を得ながら、より良い教材を効率的に作成することができます。また、児童生徒が語彙や表現の支援を受けつつ伝え方を工夫し、「伝え合いたい」という思いを大切にして学ぶことができるようにすることが大切です。
- 近年、ＡＩを搭載し、スピーキング・ライティングの学習用にカスタマイズされたアプリが多数開発されています。活用する際には、学習の個別化を図りつつ、児童生徒にとって最適な学びとなるよう、教員が明確な意図をもって授業に組み込んで活用し、学習を支援することが重要です。

客観指標の検証による指導改善

【取組４】全ての児童生徒が外部試験に挑戦し、教員が指導改善に生かす。

- 外部試験は、指導改善の観点から、市内にとどまらない大規模な集団の中で児童生徒の英語力を客観的に把握する機会となります。CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）により、「何を知っているか」ではなく「何ができるか」（CAN-DO）に基づき、言語の習得度を測ることができます。出題内容や受験結果を踏まえ、児童生徒の「できた！」を保障する指導ができているか、世界に通用する実践的英語力を育成できているかを振り返り、指導改善につなげることが重要です。

【取組５】児童生徒の英語学習への意識・意欲を把握し、向上させる。

- 英語学習への意識・意欲や自信に関する調査を実施し、取組の効果を測定します。特に、発達段階の進行に伴って意識や意欲を低下させることなく、維持・向上できているか把握し、指導改善につなげます。

国際コミュニケーションの土台となる豊かな感性の育成

【取組６】文化・習慣等の違いについて理解を深める授業をつくる。

- 英語教育を通して多様な世界観に触れ、「自分と他者の“あたりまえ”の違い」や「違いがあることのおもしろさ」に気付けるようにします。その上で、様々な文化やその背景、習慣の違いへの理解を深め、国際コミュニケーションの土台となる豊かな感性を育みます。
- 国際理解を深めるうえで、ALTは、「異なる文化的背景を持つ人」として重要な役割を担います。ALTとの交流を充実させることで、児童生徒が言語や文化の違いによる新たな気付きや戸惑い、驚きを日常的に経験できるようにすることが重要です。こうした経験は、「あたりまえ」を問い直すきっかけとなり、新たな視点の獲得を通して、より深い国際理解の促進につながります。

【取組７】学校内外で国際交流活動を実施する。

- 日々の授業での工夫やALTの活用による国際理解を土台としつつ、学校教育活動の様々な機会を捉えて国際交流活動を積極的に設定します。オンラインでの双方向的なやり取り等も適切に組み合わせながら、児童生徒が実際に他者と英語でコミュニケーションを行い、新たな気付きを得られる場面を創出することが重要です。

【取組8】社会や世界とのつながりを実感できる授業をつくる。

- 授業を通して、社会や世界で起こっている事象を知り、それらが自分自身と密接に関わっていることを児童生徒が実感できるようにします。また、国際理解を深める中で、「共通語としての英語」の役割を認識し、英語が自分の世界を広げるツールであることを実感できるようにします。これらを通して、児童生徒が、英語学習の意義深さを理解して、自ら学習に取り組むことができるようにします。

【取組9】児童生徒が英語力の推移を把握できる機会を担保する。

- 児童生徒の学習意欲の持続を図るうえで、自身の英語力の推移を継続的かつ客観的に把握できるようにすることは重要です。外部試験の受験や学校外の英語イベントへの参加を促進するとともに、授業では定期的にパフォーマンステスト（パフォーマンスチャレンジ）の機会を設け、授業内外で、全ての児童生徒が英語力の推移を実感できるようにします。

各学校で取組を進めるにあたっての考え方

— 学校全体の取組とするために —

英語を学ぶ意義は、言葉、文化、コミュニケーションへの理解を深め、考えが磨かれ思考の幅が広がることを通して、よりよい社会や幸福な人生を志向するための土台を築くことにあります。児童生徒の豊かな感性を育む取組を学校全体で推進しましょう。

また、コミュニケーション能力は、英語に限らず、総合的な学習（探究）の時間、特別活動をはじめ、学校教育活動全体で育まれます。他教科での学びを英語の授業に生かし、英語での学びを他教科の授業に生かしていくことが重要です。カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、学校全体の取組となるようにしましょう。

第4章 取組の推進体制

1 各学校

第3章に掲げる具体的な取組内容を、児童生徒の実態に応じて着実に推進し、英語教育のさらなる充実を図ります。

2 教育委員会

各学校の取組を支えるため、中長期的な視点で計画的に必要な環境の整備を進めるとともに、研究会との連携や研究指定校の取組を通して、創意工夫にあふれた実践の創造・発掘・発信を進めます。

教員のスキルアップの支援

- 教員研修や本取組指針の事例紹介、学校訪問での指導助言等を通して、全ての学校（小学校・中学校・小中学校・高等学校・総合支援学校）の取組を支援します。
- 小・中学校段階においては、学習内容や評価の在り方を明示した「京都市立学校教育課程指導計画（京都市スタンダード）」を適時改訂し、全校での指導の充実を図ります。
- A L T対象の授業実践に関する研修や、指導的役割を担う本市独自任用の「C I T Y - A L T」が主導する形でA L Tの育成体制の充実を進めます。
- その他、教員の資格取得の奨励等、各種制度を整備して教員のスキルアップを支援します。

人材確保・連携体制の充実

- 教員採用試験において、一定の英語力を有する受験者へ、特別選考（CEFR C1相当以上）を設けたり、一部試験免除（CEFR B2相当以上）を講じたりすることで、本市の英語教育を担う優れた人材を持続的に確保します。
- A L Tの小・中学校段階における1校1人配置の実現を目指して配置を拡充し、教員や児童生徒との関係性の深化を通して、授業内外のコミュニケーションの充実を推進します。
- 「多文化学習推進プログラム」や「国際理解プログラム（P I C N I K）」等を活用し、各学校が実態に応じて留学生や地域人材を活用できる体制の整備を進めます。
- 企業団体や大学、地域とも連携しながら、児童生徒が教室での学びを実践する場を創出します。

外部試験の導入

- 市立高校での実践的英語力測定調査事業（平成28年度～）による外部試験の実施に加えて、小・中学校段階における外部試験の導入を進め、全ての児童生徒が外部試験に挑戦できる環境を整備します。
- 全市実施の対象となる学年以外の児童生徒の受験機会を確保する観点から、受験料補助制度や市単位での団体受験の実施等も継続します。

研究指定校における実践の普及

- A Iを含むI C Tツールの活用について研究指定校での実践研究を推進し、A L Tの活用との適切な組み合わせ等、効果的な取組を検証します。研究成果は全市に共有し、併せて必要な環境整備を進めることで、実践の普及を図ります。
- 小・中・高校段階の校種間での連携について研究指定校での実践を重ね、12年間を見通した継続性のある指導モデルの創出・普及を図ります。

+

検証

令和13年度まで第5章に掲げる指標に基づく検証を継続的に行い、施策の点検、見直しを行います。進捗状況や効果的な取組は「事例集」等に掲載し、各学校での分析に資する全市データを発信します。

第5章 指標

本市が目指す英語教育の実現度を把握する目安として、以下の指標を設定します。
これらの指標について継続的に検証することで、必要な施策・取組の参考としていきます。

指標	現況値	目標値
中学3年生の英語力(CEFR A1レベル以上) ※1・3	取得 27.7% 相当 59.0%	相当 80% (国目標：60%)
高校3年生の英語力(CEFR A2レベル以上) ※1・3	取得 79.5% 相当 81.7%	相当 100% (国目標：60%)
授業における英語担当教員の英語使用状況 ※2・4	小 31.9% 中 19.0% 高 23.8%	小 中 40% 高
求められる英語力(CEFR B2レベル相当以上) を有する担当教員の全担当教員に占める割合 ※2・5	小 6.0%	※モニタリング指標
	中 66.8%	中 80%
	高 94.8%	高 100%
児童生徒の英語学習への意識・意欲 ※6 (「英語の勉強は好きだ」「もっと英語で伝え合える ようになりたい」等)	※モニタリング指標	
授業における、児童生徒が英語で活動する時間 ※7	※モニタリング指標	
本取組指針に基づく授業の充実の達成状況 ※7	※モニタリング指標	

- ※1 令和7年度英語教育実施状況調査（文部科学省調査）による。
- ※2 令和7年度英語教育実施状況調査（文部科学省調査及び京都市調査）による。
- ※3 「取得」は外部試験の級やスコアを取得している者の割合、「相当」は級やスコアは取得していないが、それに相当する英語力を有していると英語担当教員が判断する者も含めた割合を指す。
- ※4 授業における英語担当教員の英語使用状況について、発話の75%以上を英語で行っている学校数の割合を指標とする。小学校は高学年（5・6年生）の平均値、中学校は3学年の平均値、高等学校は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲの平均値を参照している。
- ※5 英語能力に関する外部試験を受験してCEFR B2レベル相当を取得している教員数の割合を指標とする。
- ※6 全国学力・学習状況調査の質問調査や、児童生徒を対象とした本市独自アンケートにおいて、複数の設問を組み合わせで指標を設定する。
- ※7 教員を対象とした本市独自アンケートにおいて、複数の設問を組み合わせで指標を設定する。

資料集

京都市英語教育のあゆみ

年度	国	京都市（学校・研究会・教育委員会）
H6 年度		小学校英語教育実践研究協力校(2 校)設置
H8 年度		実践研究協力校 +3校
H11 年度		全小学校で英語活動実施
H12 年度		ALT を小学校に配置
H14 年度		小学校英語活動指導計画・活動事例集 作成 京都市小学校英語活動研究会 発足
H15 年度	「英語が使える日本人」の育成のための行動計画策定	中学校英語科悉皆研修 実施(～H17)
H16 年度		第1回全国小学校英語教育実践研究大会を京都市で開催 (以降、第 2、3、5、7、9、13、21 回大会を開催)
H17 年度		「京(みやこ)・英語スタンダード」(小・中) 作成
H19 年度		市独自小学校英語教材“Hello, friends” 作成
H20 年度	第1期教育振興基本計画(対象期間:H20～H24)	小学校学習指導要領先行実施 ・外国語活動年間 35 コマ(5・6 年生) 外国語活動の指導計画・指導案集 作成
H21 年度	学習指導要領移行措置(小・中学校)	中学校学習指導要領先行実施(一部) ・英語授業時数増(週 3→週 4)
H22 年度		外国語活動の指導計画・指導案集 改訂(H23 版)
H23 年度	小学校学習指導要領全面实施 ・外国語活動年間 35 コマ(5・6 年生)	
H24 年度	中学校学習指導要領全面实施 ・英語授業時数増(週 3→週 4)	
H25 年度	高等学校学習指導要領全面实施(年次進行) ・英語での授業を基本とすることへの転換 第2期教育振興基本計画(対象期間:H25～H29) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画	English Shower 開始(H26 から全小・中学校で実施) Kyoto Global Kids(小) 開始 市立高校グローバルリーダー育成研修 開始 海外留学支援事業(～R3。高)
H26 年度		英語教育推進研究拠点校事業(～H29。小中高) 英検検定料補助事業(中・高) 開始
H27 年度	生徒の英語力向上推進プラン ・都道府県ごとの目標設定・公表を要請 ・「英語教育実施状況調査」に基づく生徒英語力の 結果公表	英語村開設(市立日吉ヶ丘高等学校内) 英語教育推進 cascade 研修の実施(～H30。小中高対象)
H28 年度	都道府県別の生徒英語力の公表、中教審答申 新学習指導要領告示(小・中)	実践的英語力測定調査事業(高 2GTEC 受検) 開始
H29 年度		小学校英語の先行実施>Hello English)開始

H30 年度	新学習指導要領移行期間開始 第3期教育振興基本計画(対象期間:H30～R4) 新学習指導要領告示(高)	全小・中学校で新学習指導要領先行実施 【小学校】 ・5、6年生で外国語活動の教科化・授業時数倍増 ・3、4年生で新たに外国語活動導入 ・新指導要領を踏まえた悉皆研修(R1～R3) 【中学校】 ・Can-Do 設定、英語での授業を基本とすることへの転換 等 ・英語授業実践講座の実施(R1～R2) 外国語小中高連携講座開始(R1～) ALT & You(ALT を活用した教員向け英会話研修)開始(R1～) Enjoy English 開始(H30～。小)
R1 年度	全国学力・学習状況調査(中)で英語実施 (以降、3年に1回程度実施予定)	
R2 年度	新小学校学習指導要領全面实施	全小(R2～)・中(R3～)で新学習指導要領全面实施
R3 年度	新中学校学習指導要領全面实施	小学校英語活動全面实施(R2～。1年生 10h、2年生 15h) 小学校専科教員向け研修会開始
R4 年度	新高等学校学習指導要領全面实施(年次進行)	「令和みやこ英語スタンダード」作成(小)
R5 年度	第4期教育振興基本計画(対象期間:R5～R9)	「小学校外国語評価ガイドブック」作成 English バスツアーの実施開始(～R7。小・中)
R6 年度		「令和みやこ英語スタンダード」、「小学校外国語評価ガイドブック」の改訂(小)
R7 年度	「AI の活用による英語教育強化事業」開始	「小学校外国語評価ガイドブック」の改訂(小) 英語教育の充実に向けた調査研究事業(～R8。小・中) 英語教育重点ブロックの指定(小・中)
R8 年度		「英語教育の充実のための取組指針」の作成 (実施期間: R9～R13) 「英語教育の充実のための取組指針」推進に向けた 実践研究事業(小・中) English Cafe Festival の実施開始(小・中)

小学校英語の授業時数の変遷

年度	1・2年			3・4年			5・6年		
	国	本市 研究校	研究校 以外	国	本市 研究校	研究校 以外	国	本市 研究校	研究校 以外
H29	－	10～15h	任意	－	20～35h	12～16h	35h	55～70h	35～55h
H30	－	15h	任意	15h	35h	23～35h	50h	70h	55～70h
R1	－	15h	任意	15h	35h	35h	50h	70h	70h
R2～	－	全面实施 (1年 10h、2年 15h)		35h			70h		

取組指針の策定経過

有識者からの意見聴取

4名の外部有識者から、取組指針や本市の英語教育について御意見をいただきました。

主 な 御 意 見

【総論】

- 「京都は日本の顔」。訪日外国人が京都で出会う子どもたちは、「日本の印象を決定づける存在」である。京都市の英語教育を充実させ、「一流のコミュニケーション」ができる子どもを育成したい。
- 「AI時代」に京都市が目指すべき「一流のコミュニケーション」とは、相手と視線を合わせ、感情を乗せて通じ合う“生きたコミュニケーション”であり、このコミュニケーションから逃げずに積極果敢に取り組む姿勢を育みたい。
- 独自任用(直接雇用)によるALTの増員と外部試験の導入は大前提としたうえで、国も推し進めているAIアプリの導入も含めた三本柱で、一体的に進めることが重要である。
- これまでの学校現場の実践に支えられた京都市の子どもたちが持っている能力は極めて高い。全生徒が外部試験を受験すれば、その実態をより正確に把握でき、必然的に文部科学省の調査においても英語力の順位はトップレベルにまで上がる。トップになることは、子どもの自尊心にも作用し、他教科の学習や非認知能力にも良い影響を与える。必要な投資を惜しまず、着実に取組を進めてほしい。

【伝え合う力】

〔 聞く力の強化 〕

- 伝え合う力を育むうえで日本の子どもに圧倒的に不足しているのは「音のインプット」。中学1年生までは書くことに固執しなくてよい。常時間も活用しながら、音声中心の指導を強化する必要がある。
- 即興でやり取りするためには、相手の話す内容を理解する力が欠かせない。併せて、意味や構造を理解して行う音声トレーニングにより文構造を習得し、反応速度を速めることが有効である。

〔 ALT と AI が生み出す好循環 〕

- 京都市のALTの配置数の少なさに驚きを禁じ得ない。ALTは最低でも1校1人配置する必要がある。ALTが日常的に授業に入り、教師と日々連携することで、教師の授業デザインが変わる。AIは豊富な練習機会を提供できる優れたツールである。しかし、感動や達成感、人と心が通じ合う喜びを生み出すことはできない。だからこそ、AIで練習し、ALTとのコミュニケーションで試すという好循環が重要である。リアルなコミュニケーションで「英語で伝え合う喜び」を知ればこそ、AIでたくさん練習したくなる。AIアプリとALTの配置は必ずセットで整備しなければならない。
- AIを効果的に活用するためには、教師の専門性が不可欠である。教師による適切なフィードバックと伴走があってこそ、公正で個別最適な学びは実現する。

〔 ALT の配置で実現する授業づくり 〕

- ALTを1校1人配置し、ALTを習慣的に活用すれば、小学校においても90%程度は英語で授業できる。子どもは最初から全てを理解できなくても良く、習慣的に英語での授業を受け続ける中で理解できるようになる。日本語で補足する際は場面を分けて行うとよい。「英語で表現することが当たり前」の環境を多く作ることが、英語で伝え合う力を向上させる鍵になる。
- 異なる文化的背景を持つ相手には、日本語直訳の英語では伝わらない。「相手が変われば表現も変わる」ことへの気付きは、ALTが授業に入るからこそ実現する豊かな学びである。
- 頭の良さや頭の使い方ではなく、「相手と伝え合う力」を評価する視点が不可欠である。授業では、「文法を間違えないこと」よりも、「英語で伝え合う喜び」を優先する発想への転換を図りつつ、パフォーマンステストで、意欲や表現の量も含めて評価していく必要がある。外部試験についても、「相手と伝え合う力」を測ることができ、正確な結果分析を通して指導法の改善につなげることができるものを導入するべきである。

【違いを越えてつながる力】

- 「多様性の肯定は10歳までが勝負」だと思っている。小学5年生頃から日本では同調圧力が強まるように思う。だからこそ、英語教育を通じて、「違いがあることは面白い」「自分と他者の当たり前は違う」という感覚を育みたい。
- ALTは単なる英語話者ではない。「異なる文化的背景や価値観を持つ人」として、自己表現の仕方や主体的な姿勢、多様な生き方を体現する存在である。そんなALTに子どもが日々接すること自体に大きな教育的価値がある。
- 英米圏以外を含め、多様な文化的背景を持つALTを積極的に登用すべきである。多様な文化や価値観に日常的に触れられるようにし、国際理解を増進したい。

【人生を拓く力】

- 「英語は世界を見る窓」。英語で世界を学び、自分の人生とのつながりや、「英語は便利なツールである」ことに気づいたとき、英語学習は自分事になる。「文法的正しさ」の授業ばかりでは、子どもは英語への興味を失う。

◆ウスビ・サコ 氏（東京都公立大学法人 理事） 令和8年1月19日(月)（於 京都市立朱雀中学校）

◆金丸 敏幸 氏（京都大学 国際高等教育院 准教授） 令和7年12月11日(木)（於 京都大学）

◆鈴木 寛 氏（元・文部科学副大臣、元・文部科学大臣補佐官） 令和8年6月15日(月)（於 京都市役所）

◆細田 眞由美 氏（前・さいたま市教育長） ①令和7年12月2日(火)（於 京都市立安井小学校）

②令和8年6月15日(月)（於 京都市役所）

※五十音順

現場教員からの意見聴取

京都市小学校英語教育研究会、京都市立中学校教育研究会英語部会、京都市立高等学校教育研究会英語部会の皆様から御意見をいただきました。

主 な 御 意 見

【総論】

- 訪日外国人の多い京都市に合った「目指す姿」だと思う。グローバル社会で活躍し、生涯にわたって学び続けてほしいという願いも、これからの時代に合っていると思う。
- 第3章に掲げられている「英語を学ぶ意義」に深く共感する。英語のスキルにのみ焦点が当たる指導ではなく、「英語教育を通して、人間教育をする」というイメージが持てるような指針になればと思う。
- 英語を使うことにためらいを覚えず、日本語を話すように自然に英語を話せる子どもを育成したい、という私たちの思いが「物怖じしないスピリッツ」という言葉によく表れている。
- 「物怖じしない」の次の段階である、「どうすればコミュニケーションが上手くできるようになるのか」という問いに向き合い続けたい。相手への敬意や自分自身を大切にすることも、国際的視野に立つうえで重要だと思う。また、生涯にわたって学び続けるためにも、「言葉」そのものへの関心を高めるにはどうしたらいいかが問われているようにも思う。
- 「目指す子ども像」の子どもにはどんな力が身につけばよいか具体化すると、「即興で、文法の間違いなどにあまりこだわらず、ジェスチャー等を交えながら自分の伝えたいことを伝えられる力」「相手の言っていることが分からないとき、理解するために相手に何を願えば良いか判断し、実行する力」「地元の良さ・課題、日本の良さ・課題、世界(地球)の良さ・課題について考え、理解できる力」「一人では実現・解決が難しいことでも、他者と力を合わせ課題解決に向かえる力」だと考える。最後の2つは、他教科(総合・道德等)でも育成を目指せる力であり、カリマネで教科横断的に育成を図りたい。
- 小・中・高の連携をさらに進めるためには、情報共有や実践交流の機会を充実させることが重要である。特に、高校教員による中学校の授業見学の機会が必要。

【授業づくりについて】

- 京都や日本の魅力を発信する機会を設けたい。その際、京都や日本の美しさ、素晴らしさを教員自身が実感としてもっていることが重要だと思う。
- 自分とは違った考えの人を理解しようと努め、認め合う態度を育む際に最も重要なのは、指導者の「指導」である。誰かの発表や間違いをクスッと笑ったり、茶化したりした瞬間を見逃さず捉え、「流さない」「許さない」「めんどくさい」指導を続け、誰かの発言の後にポジティブな声かけや拍手が起こることが、「当然のように自然に」できるまで教室を創り上げていくことに尽きる。
- 授業で学んだことを実践できるリアルな場面を少しでも提供してあげることが児童生徒と教員のモチベーションにつながると思う。また、京都や日本の発信をする機会も実際に作ってあげたい。海外の英語話者とオンライン等でつながる機会があると、英語を話す必然性やモチベーション等も含めて、子どもたちにとって大きな学びになると感じる。その際、英語がネイティブではない話者との交流であれば、発音や表現に対する心理的なハードルが下がり、自信や意欲の向上にもつながるのでは。
- 実際のコミュニケーションで英語を使って上手くいったという成功体験が重要。さらに、「英語はいつも正しく使えるわけではない」という不完全性を受け入れることができる機会を設定できれば、「物怖じしないスピリッツ」の獲得に大きく寄与すると思う。そのためには、あらかじめ準備して挑む言語活動よりも、実際のコミュニケーションに近い取り組みが必要。
- 日々の授業で、児童生徒同士でも日本語を使わず英語だけでコミュニケーションを取る時間を作り、練習していくことも重要だと感じる。
- 英語を通して探究的に学ぶために、英語の授業を通して知った世界や社会の課題と自分の興味関心が重なる部分がある子どもの探究課題となるような、仕掛けのある指導が必要だと思う。「世界のために自分には何ができるのか」を問い続ける課題設定を。その際、「関係ない」「自分には何もできない」という考えの子どもには、「何もできない」のではなく「何もできないと思い込んでいるだけなのかもしれない」と子ども自身の考えを変えていけるような、指導者のあたたかい発言や姿勢が必要である。

【パフォーマンステストについて】

- 指針の内容を具体化する際に一番に思い浮かぶのは、評定に直結するパフォーマンステストである。現状、パフォーマンステストの質にはバラつきがある。「パフォーマンステストが楽しい」と思えるところまで質を上げることが重要だ。そうすれば、指針が目指す英語力の育成につながるはず。例えば、パフォーマンスの内容が世の中のサービスに結びついたり、特定の誰かの役に立ったりするように設定すべき。ALT が、児童生徒のおすすめの日本食を本気で教えて欲しいと思えば、その思いは児童生徒にも伝わり、パフォーマンステストは価値ある対話となる。紹介した食べ物を実際に ALT が食べに行くことにつながると、児童生徒は嬉しい。身近な「特定の誰か」として、ALT の存在は大きい。

【ICTについて】

- AI の進化とともに子どもたちは本当の「知」を獲得できているのだろうかと感じる。知識が乏しい生徒が AI の力を借りる傾向にあり、結果として何も習得できていないことがある。学ぶ必要性を感じていない生徒もいる。AIの適切な活用について、具体的な活用事例の共有やガイドラインの整備が必要。また、身につけてきた知識や思考力を使って、自分の地域や文化、他者への理解・共感等を英語で伝えられるように育成することを、教師は忘れてはならないと思う。

【取組の推進体制等について】

- 学生のまち・京都にはたくさんの外国人留学生がいる。留学生たちともっと交流できないだろうか。
- 京都市の利点を生かし、インタビュー活動等、実際に海外の方と触れ合う機会をたくさん増やしたい。
- 負担になるかもしれないが、指針を踏まえて、自分達はどういう力を身に付けさせたいと思うか、そしてそのためにどういう取組をしていきたいかを、レポート等で提出し交流する場があれば、お互いが刺激を受け、やる気につながっていくように思う。
- 授業時間の確保が課題になるが、「京都や日本の魅力を発信するためのプレゼンテーション」にパフォーマンス課題等で取り組み、可能であれば、京都市中学校総合文化祭などで行政区毎や全市のベストを決めるのも良いかもしれない。
- グローバルな人材を育てるためには、先生たち自身がそうであるか、またはそうなりたいと思っていなければ難しい。教員向けの海外研修や、英語を多用する国内企業等での研修の機会があれば、モチベーションになるだけでなく、児童生徒に授業で伝える内容も違ってくるのではないかな。

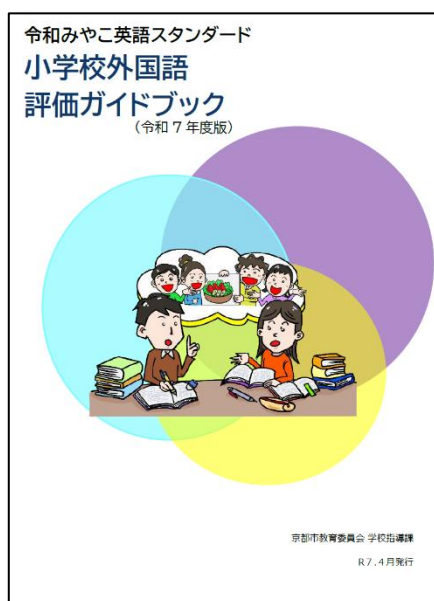
参考資料



- ・ SMART PORTAL 上に、「京都市英語教育の充実のための取組指針」事例紹介ページを開設し、事例集を掲載する予定です。
- ・ SMART PORTALの「京都市スタンダード」のページもご覧ください。
「令和みやこ英語スタンダード」も、同ページから閲覧することができます。



令和みやこ英語スタンダード



令和みやこ英語スタンダード
小学校外国語評価ガイドブック